

摂食障害の人の基本的信頼感について

The Basic Trust of Eating Disorders

谷口（藤本）麻起子

Makiko Taniguchi (Fujimoto)

要 約

本論文は摂食障害の人の内的世界を、TAT 図版 12BG への語りを元に検討することが目的であった。TAT 図版 12BG を摂食障害の女性 24 名、比較検討として女性 24 名に施行し、M-GTA によって語りのテーマを整理した。その結果、「つながり」「変化」「主体性」「心地よい世界」といった 4 つのカテゴリーが見出された。カテゴリーごとの出現度数の比較や、事例を詳細に検討したところ、摂食障害の人は誕生以前の一体的世界への志向が強く、自他が分離していくことを意味する成長や、境界づけが困難であることがわかった。そしてその背景には人とのつながりを意味する基本的信頼感の希薄さ、あるいは基本的信頼感が成立していないことが推測された。これらの基本的信頼感の違いというものが、摂食障害の本質を反映し、心理療法でも検討されるべき点であると考えられた。

Key Words : 摂食障害 TAT 基本的信頼感

1. 問題と目的

摂食障害 (Eating Disorder) は背景に心理・社会・生物学的要因が複雑に絡んでいる、食行動異常の障害である。著しい体重低下にも関わらず摂食を拒むこと (拒食)、一度に大量の食物を摂取し、しばしば嘔吐や下剤によって排出すること (過食) など、表現されている症状としては食行動の問題であるが、その背景に体重増加に対する恐怖、ひいては体重増加に左右される自己評価の低さといった心理的特性があることはかねてより指摘されており、治療においても体重増加だけで十分とは考えられないというのが、摂食障害治療者の共通認識である。

そのため摂食障害の人の心理特性に焦点を当てた研究も数多くなされてきた。特に摂食障害の人の数が増えてきた 1980 年代、1990 年代は心理検査を用いた研究報告がそれなりにみられた (原田・1998, 諏訪・2006 など)。しかしながら一通りの心理検査の報告が出された後は、摂食障害の病態の広がりやのせいもあってか、心理検査を用いた研究報告は減

っていると思われる。

とはいえもちろん摂食障害の人の心性が理解され尽くしたわけではない。摂食障害の人が身体や行動を用いて表現している“ところ”については、まだまだ分からないことも多い。治療には中断事例も多く、摂食障害の人が自分を症状以外で表現し、それが受けとめられるという機会も、それほど多くないというのが実際かもしれない。ならばこのころの表現手段ともなる心理検査を介して摂食障害の人の内的世界を考えていくことは、これからの摂食障害治療を考える上でも重要なことであると思われる。

そこで筆者は数ある心理検査の中でも、TAT (Thematic Apperception Test) を用いて摂食障害の人の理解を試みてきた (藤本・2002, 藤本 2005 など)。TAT は場面が描かれた図版に対して物語を作る検査で、投影法に位置付けられる。人物や場面の特徴が図版ごとに異なっており、またある種の危機的状況が描かれているため、語り手はある種の葛藤や不安な状況に晒され、それに関わっていくことが求められる。ただしロールシャッハテストほどの侵襲性はなく、不安な状況を無視することができるという特徴もある。このように TAT への語りから、語り手のパーソナリティ、対人関係の在り様、防衛スタイルなどが伺われるのだが、TAT にはさらに語り手の内的世界、言わばイメージを表現してもらう手段としても優れている。比較的侵襲的でなく、かつイメージをある程度枠に沿って表現してもらうことのできる TAT は、検査や治療に対して防衛的なことも少なくない摂食障害の人にとって、比較的無理なく自分を表現できるのではないかと筆者は考え、これまで研究場面で実施してきた。今回はそのうち、図版 12BG に対する語りについての検討を行う。

TAT 図版 12BG は、左手に大きな木、右手に一層のボートが描かれ、全体として自然の風景が描かれている図版である。名前 (BG : Boy and Girls の略) にある通り、子ども向けの図版であるためか、あまり使用されたり注目されたりしない図版と言えよう。しかし人物が描かれていない「牧歌的な静かな田園風景」(坪内, 1984) であることから、TAT の最終図版として心の動きや語りを穏やかにおさめていく役割をもつと筆者は考え、最終図版として使用した。

坪内 (1984) によると図版 12BG では誰もいない絵の場面にも人物を導入するか、この絵のかもしれない心地よい情緒性を扱う、「心の安定性の程度」が解釈のポイントになるという。前者の人物を導入するかどうかについては、広く語り手の人間関係を検討するという意味で他の図版でも表れやすいが、後者の「心の安定性の程度」については図版 12BG ならで

はの特徴である。心のあり様を広く深くうつしとるのが心理検査であるものの、ともすればネガティブな側面に焦点が当てられやすい中、「その人が元々もっている健康的な側面」ともいえる「心の安定性の程度」が摂食障害の人ではどのようなものかを考えることは、心理療法を行っていく上でも重要なポイントであると言える。

以上のことから本論文では、TAT 図版 12BG に対する語りから、特に「心の安定性の程度」に着目して摂食障害の人の内的世界について検討することを目的とした。

2. 方法

2.1. 調査協力者

病院の内科・精神科を受診しており、DSM-IVに基づいて摂食障害の診断を受けている人と、摂食障害自助グループの参加者 30 名（以下、摂食障害群とする。11～30 歳の女性で平均年齢は 22.6 歳）。調査時の主な症状は拒食 14 名、過食 16 名であった。また比較検討のため、対照群を設けた。対照群も 30 名で全て女性であった（12～34 歳、平均年齢 21.2 歳）。

2.2 調査用具

Harvard 版 TAT 図版 12BG、記録用の筆記用具と白紙を用いた。なお他の目的に応じて TAT 図版は 7 枚実施した。12BG 図版はそのうち最後に施行した。

2.3 手続き

調査は個別面接法で行った。研究協力と研究上の公開に承認が得られた人に対して図版 12BG を提示し、「特に難しく考える必要はありません。絵がどんな場面をあらわしているか、場面の中の人はどうなことを考え感じているかを想像していただきます。今現在のことに加え、これまでにどんなことがあってこのようになってきているのか、これからどうなっていくのかなど、これまでのこと、これからのことも織り交ぜて、1 つの簡単なお話をつくってもらいたいです。絵をよく見て、イメージをふくらませてください。絵をよく見るために、手にとっていただいてもかまいません。前の絵や物語に戻らないようにしてください。正しい物語や間違った物語、というものはありません。また知能や文章力などをみるための国語のテストでもないので自由に作成してください。物語の長さを気にする必要はありません。また時間制限はありません。」と教示した。

3. 結果と考察

3.1 出現カテゴリー

3.1.1 カテゴリー分け

鈴木（1997）によると、人や動物の姿が見当たらない自然の情景の図版 12BG をどうとらえるかというところには、“人間への関心の強弱”，“語り手自身の自然に対する態度”が反映される。そこでこの2点を念頭に置きつつ、データを M-GTA によって検討し、表れているテーマがどのようなものであるかによって、群ごとにカテゴリー分けを行った。

M-GTA を採用したのは、これがデータに密着した質的な分析法であり、TAT という語りを検討する方法として適すると考えたためである。また群ごとにカテゴリー分けを行うことには、「群ごとに違いがある」ことを前提としてしまいかねない問題がある。しかし今回は群の比較によってその共通点や相違点を浮かび上がらせ、臨床群の特徴を考えることを目的としたため、まずはあらかじめ群を分けた上でカテゴリー分けを行った。以下、各カテゴリーの定義について述べ、出現度数と比較結果によって考えられたことを記していく。

まず臨床群は7つのカテゴリーに分けられた。カテゴリー名と定義及び出現数は、「①：人との関わりがなくなった寂しさ：（定義）人がいない、いなくなるという設定があり、ひとりでの寂しさや生きていけなさがうかがわれるもの；9名」，「②：人との隔絶：（定義）人から遠ざかっているという設定があり、人間関係からの隔絶がうかがわれるもの；3名」，「③：周囲に支配される主体：（定義）図版の印象や両親イメージの支配を受けていると考えられるもので、周囲に支配されやすい主体であると推測されるもの；6名」，「④：失われた心地よい世界：（定義）なくなった心地よい世界を思慕している設定があるもので、心地よさを希求しつつ、それが失われていることが認識されていると考えられるもの；3名」，「⑤：一人の世界の親和性：（定義）一人の世界あるいは自然との一体的世界での落ち着きを述べたもので、語り手が調和する世界が絶対的なものであると考えられるもの；6名」，「⑥：深い結びつき：（定義）登場人物2人の深い結びつきを喜ぶという設定で、親密な2者関係を志向していると思われるもの；2名」，「⑦：TAT への関わり方：内容に入らないといった、TAT への関わり方が主に表れていると考えられるもの；1名」であった。

統制群の方は7つのカテゴリーに分かれた。カテゴリー名と定義は、「①：つながり：（定義）誰も来なくなった風景に誰かが来る設定から、何かとの繋がり感が推測されるもの、あるいは逆に見捨てられたという設定から、つながりの薄さが推測されるもの；13名」，「②：周囲の支配を越える主体：（定義）両親の圧力から自分を通すという設定から、他者

イメージの支配を越えていく主体が考えられもの；2名」, 「③：成長と良い対象：(定義) 成長と良い自分の成長や変化と共に, 基盤となるものの存在が実感されていると思われるもの；3名」, 「④：子ども性の再発見：(定義) 風景を子どもが発見したり, 子ども自体の遊び場を再生させたりするという設定があり, 語り手の子ども性が賦活していると推測されるもの；3名」, 「⑤：心地よい世界：(定義) 風景に現実とは離れた心地よさを見出しており, 語り手の落ち着いた心性が推測されるもの；4名」, 「⑥：新しい世界：(定義) 良い世界を発見するという設定で, 語り手の未来の変化と希望が推測されるもの；2名」, 「⑦：TAT への関わり方：図版に見出したものをつじつま合わせをするといった, TAT への関わり方が主に表れていると考えられるもの；3名」であった。

ところで両群のカテゴリーを比較検討し, これらのカテゴリーが意味するテーマには共通性や相違性をまとめると, 4つの上位カテゴリーが見出された。その4つの上位カテゴリー及びそこに含まれる下位カテゴリーを以下に説明する。

「I：つながり：(定義) 人やものとのつながりがテーマとなっているもの：(下位カテゴリー) 臨床①人との関わりがなくなった寂しさ, 臨床②人との隔絶, 臨床⑥深い結びつき, 統制①つながり」, 「II：変化：(定義) 人やものの変化がテーマとなっている者：(下位カテゴリー) 統制③成長と良い対象, 統制④子ども性の再発見, 統制⑥新しい世界」, 「III：主体性：周囲との関係における主体性がテーマとなっているもの：(下位カテゴリー) 臨床③周囲に支配される主体, 統制②周囲の支配を越える主体」, 「IV：心地よい世界：(定義) 心地よい世界との関係がテーマとなっているもの：(下位カテゴリー) 臨床④失われた心地よい世界, 臨床⑤一人の世界の親和性, 統制⑤心地よい世界」, 「V：TAT への関わり方：TAT への関わり方がテーマとなっているもの：(下位カテゴリー) 臨床⑦・統制⑦TAT への関わり方」, 以上4カテゴリーであった。

3.1.2 カテゴリーの比較検討

次に事例をあげながら, 両群の特徴を比較検討していく。まず最大度数のカテゴリーである「I・つながり」についてみていく。単純につながりがあるかどうかという点でみると, 臨床群は「⑥深い結びつきへの志向」の2名と, 「①人との関わりがなくなった寂しさ」のうち, 「最後の最後に…またいっばいの人が集まる」という1名の計3名が“つながりがある”と考えられ, ①の8名と, 「②人との隔絶」の3名とをあわせた11名が“つながりがない”と考えられた。統制群は「①つながり：のうち, 「誰も来ないままボートは朽ち果てていく」(統制6)とといった“つながりがない”と考えられたものは統制⑥, 12,

27の3名で、残り10名が“つながりがある”ものと考えられた。 χ^2 検定の結果、“つながりのない”ものについては臨床群に有意に多かった($\chi^2=5.96 < .05$)。

“つながりがある”ものについては、例えば統制群9では「このボートは(略)壊れてはいないのですが乗り捨てられて…ここに置きっぱなしにされてしまう。(略)もうボートとしての水に浮かぶという用途はなくなって、まあ子どもが遊びにきたり、とか、いう感じになる場面ですね」と語られた。ボートは乗り捨てられるが、子どもが遊びにくるところに、つながりの深さや見捨てられない自分、自分を見捨てない他者という、基本的信頼感が推測される。またボートが「水に浮かぶ」という本来の用途を失ってもなお子どもが遊びに来るところには、社会的な役割を果たせなくとも関係は切れないという強い結びつきの関係性や、自己存在への信頼の大きさもうかがわれる。このように、つながり感がみられたものが臨床群に有意に少なかったということは、臨床群にはつながり感が薄く、自他への基本的信頼感が少ないことが考えられる。

では臨床群の“つながりがある”というのはどのようなものだろうか。「臨床⑥：深い結びつき」をみると、語り18では「このボートは、ある恋人同士が乗ってたんです。あんまし人が入れないこの場所で、この2人のためだけにボートがあって、で、2人は結婚して、んで、子どもはつくらなかつたんです。(略)年をとっても、おじいちゃんおばあちゃんになっても、たまにここに来てのんびりしてたんです。けども、そのおじいちゃんもおばあちゃんも死んじゃって、舟だけが残ったんです。舟は、なんか、そのおじいちゃんとかおばあちゃんとか、恋人同士のためだけにあったもの。もう、乗らないままずっとこの湖のほとりで腐っていく…。うん、んで、でもすごく死んだり腐ったり、なんかすごく怖いことのように思えるけど、すごいこのボート優しい感じがするんです。木があるからかもしれないけど、だからこのボートも、すごく幸せなんです。」とあった。子どものいない夫婦のためだけに存在したボートは、夫婦と共にこの世から姿を消していつている。語り手が「優しい感じ」というように、2人だけの親密な世界を生きた夫婦と、この夫婦に寄り添い続けることができたボートには、この世を超えた深い結びつきの幸せなイメージが描かれている。摂食障害の人がこのように永遠に親密な関係のイメージを生きているならば、現実的な人間関係、たとえば社会的な人間関係や一時的な人間関係からは“つながり”が感じられないのかもしれない。摂食障害の人は“確かなもの”を求めるというが、それがこれらの語りにある時空を超えた結びつきであれば、現実の人間関係ではなかなか確かなものを得られない苦しみにつながりうるものかもしれない。

さて“つながりがない”ものについては、先の統制群 9 と対照的であると考えられる語りが臨床群にはあった。臨床群語り 1 では「今はこんなに人影もないけど、春になったら花がいっぱい咲いて、人がいっぱい集まって（略）秋になったらきれいな花がいっぱい咲いて、いっぱい人が集まる。また冬になって、しょんぼりした感じになる。」とあり、“花が咲くこと”で人が集まるという設定になっている。臨床群語り 14 でも、「もう花とか実とかならないので、誰も見に来なくなって、このまま枯れていく。」と同様のイメージが語られた。“花”や“実”というのはその色や形で人々の目を楽しませたり、食べられることで人を満たしたりするという特徴があることから、対他的なものであると考えることができる。また“実”は結実ということばにあるように、何かを成し遂げるという業績的な意味もあると思われる。このことから、“花”や“実”の意味する、人を引き付けること、人に役立つこと、何かを成し遂げることのない“木”だけの自分、自分の存在だけでは人に受け容れられないというイメージが語り手 14 にはあるのではないか。そして受け容れられなさは「枯れていく」という生きられなさでもあると考えられる。摂食障害の人がやせて美しくなることに強い思いがあるのは、外見で人をひきつけなければ自分は人に受け容れられず、生きていくことができないうイメージがあるのかもしれない。また臨床 17 では「この桜の木は誰も見に来てくれへんで、さみしがってるところ。…それでなんかそのまま枯れてしまう。」とあり、人とのつながりのなさには生きていけないという思いがあることもうかがわれる。

次に、“つながりのない”もののうち「臨床②人との隔絶」について考えてみる。語り 22 では「誰も乗らないボート。壊れて古くなったやつ。みんなが集まると、ここの下で花輪つくったり、おしゃべりするところなんですよ。」とあった。人が集まっていてにぎやかなイメージもあるが、「ここの下で」という、ボートの下に人が集まるという設定は不自然な趣がある。また「下で」というところにはボートと人の直接的なかわりはなく、ボートはボート、人は人、とやはり隔てられているところがあると感じられる。そして「壊れて古くなった」というように、ボートに重ねられた自己イメージは否定的である。人との関係が隔たっていることについて寂しさなどの感情は語られていないが、寂しさなどの感情をもつことでつながりを志向するところもみられないほど、自己イメージが否定的であり、人とのつながりはもてないと思われているのではないか。

それに対し、“つながりがある”ものとの比較にはなるが、統制群語り 13 は「あんまし人がいなさそうな感じ。（略）ちょっともう忘れ去られた感じで、桜か？は咲いてて、ここ

はこのまま。…ダム of 底にならなければ続いていく感じで、人はほとんどいない。」とあった。人に忘れ去られ、人間関係から遠ざかっているという点では臨床②と共通しているが、桜が咲いたままで風景は続いていくというところに、臨床群とは対照的に、ポジティブな自己イメージと自己の連続性が推測される。

このように「Ⅰ：つながり」のカテゴリー検討からは、臨床群の“人とのつながれなさ”，そのことの寂しさ，またこの世を越えた深い結びつきへの志向性が考えられた。

それでは次に「Ⅱ：変化」について検討していく。まず「統制⑥新しい世界」の統制 29 では、「去年、冬ぐらいに（略）ちっちゃなネコさんが、三匹ほど、このちっちゃな箱にのせられて、どんぶらこ、どんぶらこと、どっかの大陸からやってきて、今は初夏で、流れ着いたこの場所で、ネコさんたちが、飛び降りて、（略）またここで、新しく生きていこう。」とあった。主人公を子猫とするところや、箱にのせて流されていくというところから語り手の受身的で保護を求めるあり方がうかがわれるが、流れ着いた世界で新しく生きていこうとするところには、希望や意欲がうかがえる。このカテゴリーの語りは統制群に 2 名あったが、共に未来に対する信頼性や変化の可能性が推測された。

また「統制③成長と良い対象」には統制 5 が「子どものときに住んでいたところで、よく遊んだところ。大人になって行ってみたら、そのときに使ってた小舟と生えてた木がそのままになって、で、なつかしいな、と。だけど、もう自分は遊ぶような年じゃなくなって、で、自分だけが変わってしまったな、と思っている。」と語り、子どもの時に遊んだ風景の変わらなさや大人になった自分とを対比させて、語り手自身の成長が実感されている。また子ども時代に遊んだところが変わらずに存在し、また大人になって戻っていけるとされているところも特徴的である。統制③ 3 名はすべてこれらの特徴が備わっており、語り手の自然な成長と、良い対象の存在がうかがわれるものであった。

「統制④子ども性の再発見」には、統制群 4 「昔は、すごいきれいな、デートスポットみたいところで、観光客とかがいっぱいいたけど、今はだんだんさびれてきて、あんまり人が訪れないところになった。…でその後も、そのままずっとほったらかしにされて…いる。子どもらにとって、なんか秘密の場所になって、地元の子どもたちに、で、賑わってるような。」があった。この語りにもみられるように、放置されていた場所が子どもによって再生されるというのがこのカテゴリーの特徴である。①の「つながり」と異なるのは子どもによる再生という設定で、成長によって自然と離れていた子どもの世界に立ち戻るという意味が考えられ、語り手自身の子ども性が賦活しており、その再生力が推測される。

以上にみた「Ⅱ：変化」カテゴリーの出現度数は統制群のみ 8 名みられ、統制群の方が有意に多かった ($p=0$)。上記の質的検討からわかった自然な成長と未来への希望、再生の力が臨床群にはみられなかったということは、臨床群の人にとって自然に成長することや、変化することに希望をもつということのイメージが遠いものであると思われる。からだが発達して体重が増加することも変化であり、自然な成長の一つのかたちであるが、摂食障害の人が体重増加を恐れるのは、変化や成長に対する肯定的なイメージを抱いていないことと関連しているのかもしれない。

次の「Ⅲ：主体性」については、臨床群が 6 名、統制群が 2 名なので、出現数に有意差はない ($p=0.25$)。しかし臨床群が③周囲に「支配される」主体であるのに対し、統制群が②周囲の「支配を越える」主体であるというように、主体の表れ方は対照的になっている。例えば臨床 7 では「ちっちゃい男の子が（略）舟をみつけて、そしてこれに乗って、川を下って、2、3 日小旅行をして、帰ってきます。また、そして親に、こう心配かけたと怒られます。」とあった。「ちっちゃい男の子」が 1 人で舟に乗って 2、3 日小旅行するというのはなかなかの冒険心や好奇心の表れであると思われるが、危険性も大きなものだと考えると、なぜここまで自立的な行動をとるのかという疑問も浮かぶ。“親に心配かけたと怒られる”というところは、やんちゃな子どもに対して心配する親心ともとれるが、「また」というところに自立行動と親の怒りというのは繰り返されるパターンであると考えることができる。親から怒られるというところで話が終わっているというところにも、「怒られる」ことの重みがうかがわれる。一見主体的に振舞っているようで、それは両親イメージの圧力への反動的な行動なのかもしれないと推測することができよう。

それに対して統制 1 は「おっきなお金持ちのお家の、女の子が、時々親に内緒でここにきて、なんか本を読んだりとか、そういうことをしている場所。あるときなんか近所の家の男の子かな、が、遊びにきてて、そこで仲良くなって、毎日のようにここで遊ぶ。けど、女の子のほうが…どこか遠くの学校にやられることになって、（略）で学校を卒業した後に戻ってきたら、ちゃんとその男の子が来てて、なんか両親には反対されるけど結婚して、で、仲良く暮らす。」とあった。男の子と会えなくなるのに遠くの学校にやったり、結婚に反対したり、と両親は主人公の女の子の思いに反することをしている。しかし女の子は内緒で過ごす場所があり、両親の反対を押し切って結婚することから、両親イメージによる圧力はあるものの、自分の思いを貫く主体が考えられる。

ところで臨床群には、感覚的な反応を示していると考えられるものが臨床 5、6 の 2 例

あった。臨床 6 についてみてみると、「ちょっと前までここに赤ちゃんが寝ていて、たった今、ちょうど陽射しのおかげで、ここでお母さんが多分赤ちゃんをひなたぼっこさせていた。(略) きっと調子のいい日やったんやろうなあ。なんとなくこれ見て、私が安らいだから。」とあった。お母さんが赤ちゃんをひなたぼっこさせていたというのは暖かい母子関係のイメージ、安らぎや信頼感といったことを連想させるものであるが、「きっと調子のいい日やったんやろうなあ。なんとなくこれ見て、私が安らいだから。」というのは語り手自身の感覚を述べた反応である。語り手が図版を見て安らいだから登場人物も調子がいいというのは、連想としてあり得ることであるが、図版の世界と語り手自身の心的世界の区別があまりなく、主観性の強いものと考えることができる。いわば自分の感覚をそのまま外界にあてはめる反応とみなすことができよう。またこのことから内界と外界の境界が曖昧であり、外界に支配されやすいということも考えられる。臨床 5 についても「初めぱつと見たときは、死んでると思ったけど、ああ、生きてるって思った。木の感じが明るい。ポジティブな感じがした。」とあり、木の明るさのもつポジティブさを受けて、死んでると思ったところを生きているというように意味を反転させたところが、やはり感覚的で外界の影響を敏感に受けた反応であると考えられる。

これらのことから有意差はないものの、臨床群には周囲に支配されやすい主体の在り方であると考えられた。

それでは次に「IV：心地よい世界」を検討する。出現頻度は統制群 4 名、臨床群 3 名で有意差はなかった。まず「統制⑤心地よい世界」について、統制 11 を例に考えてみよう。統制 11 では「今日は非常にいい天気、えー、すがすがしい気分、しかもお休みであるし、外にでかけようと思って出かけていきます。そうすると、非常に自分が普段から好きな木がありました。(略) そのままのんびりと本を読んだり昼寝をしたり、えー、お弁当を食べたりして 1 日を過ごします。で、それじゃあうちへ帰って明日の準備をしようかと家へ帰ります。で、あの木もあのボートもそのままに…置いてあればいいなあと思っています。非常に、その心地よい…場所というイメージ、です。」とあった。語り手は登場人物が誰であるかを言及しておらず、まるで語り手が図版に入って過ごしているかのようなイメージであり、最後に「心地よい」と述べているように、図版の世界の心地よさに魅入られていると思われる。このように統制⑤は図版の世界の心地よさがテーマとなっているのが特徴的であるが、それは統制 22「今日は写真を撮って少しゆっくりして、家に帰ることにしよう。」にもあるように、心地よさを崩したくない、心地よいままであってほしいとい

う思いもこめられていると考えられ、語り手の落ち着いた内的世界をそのままにしておきたという語り手の願いが推測される。

「臨床④失われた心地よい世界」も、世界への心地よさを述べていることについては統制⑤と同じであるが、「失われたものである」ということが認識されていると思われる点が異なっている。臨床 9 では「この場所は、すごい、山奥の中とか、ゆったりとした場所で（略）カップルとかがゆったり過ごしたりとか、子どもたちが遊んだりする場所だった。でも実際この場所は、だんだん減って行って、今はなんか都会にして、昔はこんな場所があった、っていうような。今、今の現代社会みたい、こんなすばらしいところ、今はないんだっていう、そんな感じかな。」、臨床 10 では「ほんとはここは、もっと人がいて、栄えた場所やったんやけど（略）戦争みたいなのが起こって、みんな、すごい、殺し合いみたいなものになって、廃れてしまう。（略）ずーっとそのときのそのころを思っている人はいるけど、もうずっとこのまま。」、臨床 30 では「日本人が忘れてしまった、潤いのある、なんか素朴な自然の絵で、捜し求めるんだけど、そういう場はみつからない。だけど、忘れられない。（略）…小さいときの思い出の場所であって、夢に出てくるんだけど、もう現実にはない。」とあった。これら 3 つに共通するのは、かつて豊かであった世界を思慕としているところである。つまり心地よい世界はもう失われており、そのことを認識しているが、それでもかつての豊かな世界を思い続けている。臨床 30 の「夢に出てくるんだけど、もう現実にはない。」という語りには、夢に出てくるほどの思慕の念の大きさと共に、「現実にはない」ことのかなしみがうかがわれる。失われているのに追い求めるところが、河合（2000）のいう「しがみつきの」ともいえ、失われたというかたちで神話的世界をつくりだすところが近代的な主体の在り方であり、また神経症的である（川崎、2005）とも考えられる。

臨床群の心地よい世界のイメージは、「⑤一人の世界の親和性」にも表れていたと考えられる。臨床 28 では「ずっと、1 人。……何年も、変わらない。…静か。」と、1 分近い時間をかけて語られた。「ずっと 1 人」というのは寂しさを思い起こさせもするが、ゆっくりと時間をかけて最後に「静か」と語ったところには、寂しさではなく、非常に落ち着いた感じ、満ち足りたイメージが連想される。臨床 13 でも「さっきまで一、うーん、きょうだいが、女の子 2 人きょうだいが、ボートに乗って、すごい桜のきれいな季節にボートで遊んでて、お母さんが呼ぶので、まあ両親が呼ぶので、向こうに行ってしまうと、ボートが残されてて、何もない。春の暖かい一日で、静かで穏やかで、日がさんさんと照ってい

るようなイメージ」とあり、女の子が去って取り残されたボートは寂しさもあるかと思われるが、静かで穏やかな景色の中にあるボートに日が降り注ぐというところは、とても満ち足りた印象があり、1人であっても世界に暖かく包み込まれたかのようなイメージである。このように、臨床⑤では登場人物が一人であることが述べられつつ、穏やかな世界との関係性が描かれている。このような語りは臨床群にのみ6名みられ、有意に出現が多かった ($p=0.01$) ことから、臨床群の世界との一体的な満ち足りた関係性がうかがわれる。しかし臨床 26 では「暖かな陽射しや、緑、黄緑色の木や草、黄色の蝶、ピンクの花がたくさんあり、日ごろの生活に疲れていたおじいさんは、少し気が楽になりました。それが、おじいさんは、満開の花びらの下で、1人で亡くなりました。」とあり、調和した世界との一体化は原初的世界に還っていくことであり、現実の世界においては“死”のイメージとなるのかもしれない。摂食障害の人が食という生死を巡る症状を抱えているのは、原初的な世界を求めていることと関連していることが示唆される。

最後に「V : TAT への関わり方」は臨床群1名、統制群3名で有意差はなかった ($p=0.61$)。これはTATの語りの内容より、語りの形式がテーマになっていると思われるものである。たとえば臨床 29 では「なんか、この、ねー。ボートの…ボートの、木、木…。なんか遠くで誰かが、この景色を見てるだけって感じがするんですけどね。…それだけです」とあった。図版に描かれた「ボート」や「木」について言及するが、言及したものがつながらず、「誰かが、この景色を見てるだけ」というように、景色の中身については触れないで語りを閉じている。なぜ語りが展開しなかったのかはわからないが、最後に「誰かが見ているだけ」というようにして視点を図版の外に移して語りを終えたところには、語り手の機転のよさが推測できる。

以上のカテゴリー検討及び臨床群と統制群との比較によって、臨床群には次のような特徴が見出された。臨床群は基本的信頼感、つながりが薄く、そのことに対して寂しさを感じたり、寂しさを感じることもできないほどつながりから遠い場合があったりすることが考えられた。他者との関係については、自他の境界が曖昧で周囲に支配される主体であることも推測された。さらに臨床群には肯定的な成長や変化のイメージをもつことが少なかったが、心地よい世界が失われているという認識はあった。そして臨床群にとっての心地よさ、つながりというのは、二者関係間あるいは世界との一体的で満たされた関係性であると思われた。

Erikson (1963) によると、人は乳児期の基本的信頼感をベースとして、より高次の心

理・社会的機能がピラミッド状に発達していくという。したがって臨床群が成長や変化についてイメージしにくいというのは、基本的信頼感の薄さに関連があるのかもしれない。また逆に一体的世界で満たされたイメージをもっている人にとっては、そこを脱していくこと、つまり成長していくことはポジティブな意味をもち難く、成長や変化のプロセスを経ることに抵抗があるかもしれない。すでに心地よい世界が失われていることがわかっていると思われる臨床群の語りには思慕とかなしみのイメージが見出されたことから、このことは考えられる。

また自他の境界が曖昧であるということは、一体的世界で境界がないという状態と、自他の分離がなされていることとの中間的なものであると考えることができよう。摂食障害というのは身体の境界をつくれなかったことだと藤山（1999）は述べているが、境界の曖昧さが摂食障害の人の他者主体的な在り方とも関連していることが示唆される。

以上のことから摂食障害の人について考えるにあたり、「境界・「成長」ということがキーワードとなると思われる。そこで総合考察では、「境界」・「成長」という概念を手掛かりに、これまでの結果・考察を総括したい。

4. 総合考察

Erikson のいう「基本的信頼感」とは世界が信頼に値するという感覚のことであり、乳児期において重要な他者（Erikson は母親と考えている）に愛され育まれる体験から体得されるものと考えられている。つまり人は、母子の一体的世界において生きることへの根源的な安心感を得るのである。Neumann（1949）も母親との確か度で信頼に満ちた関係の上に乗って、世界と自分自身を受け入れることができると述べている。

本研究では摂食障害の人に基本的信頼感やつながりが薄いということが見出されたが、上記に述べた基本的信頼感の性質を考えると、摂食障害の人は生きることへの安心感が薄いという、深刻な不安を抱えていると思われる。また一体的世界が基本的信頼感を育む基盤となることをふまれば、基本的信頼感が薄い人は、一体的世界の肯定的な体験が十分得られなかったということも推測される。松木（2009）は摂食障害の中核的な不安は、「むなしい」「自分には何もない」といったことばで語られる「抑うつ不安」とであると述べている。そしてこの「抑うつ不安」の病理の基盤は、おそらく乳幼児期に母親との関係において体験された「母親の愛情の喪失」の不安、あるいは乳幼児期に母親が情緒的に不在であったため、母親の愛情を得られなかったり、愛情を失う不安に翻弄されていたことがうか

がえる場合が少なくないという。ここでいう「母親との関係」は母親との一体的世界とおきかえられると思われるが、松木の考えでは“一体的世界を失うことの不安”と“一体的世界が得られなかったことによる生への不安”とが区別はされているが併記されている。しかし一体的世界で肯定的な体験をしているか、そもそも肯定的な体験自体が十分でなかったかということは、生を支える基本的信頼感をいかに持ち得ているかということに違いを生み出すと思われる。本研究では臨床群語り 24 で、「ぼろぼろな木になって」「ボートも誰も乗らなくなって」と、自己イメージは否定的でつながりが絶たれた状況が語られていたが、「昔は人がいっぱい集まる、きれいな湖みたいにある公園」、「最後の最後に、きれいに掃除されて、新しくつくりかえられて、今はまたいっぱいの人が集まる公園になった」と過去と未来では自己イメージが肯定的で、人とのつながりもあることから、根底には基本的信頼感があるものと思われる。しかし臨床群 25 では「荒野の荒れた池に、川沿いに、もう枯れた木と枝が立ってて、そこには濁流や何かで流された、ぼろい舟がある。でもここは誰もすんでなくて、誰も目に付かないところ。」とあり、「濁流や何かで流された」というところに、この人が否定的なものの中で生きてこざるを得なかったことが推測され、基本的信頼感が芽生えるような愛情を得られなかったのではないかと思われる。「人との関わりがなくなった寂しさ」ではつながりが薄いものの人を求める寂しさがあり、基本的信頼感があることがうかがわれたが、「人との隔絶」では語り手の孤立した状況が述べられており、基本的信頼感の希薄さが推測された。同じ摂食障害でも基本的信頼感の程度、またその基盤となる一体的世界の体験が異なっている可能性があるといえよう。

ところで一体的世界というのはどのようなイメージなのだろうか。Neumann (1949)によると、早期母子関係における一体的世界では世界も母親も自分自身の身体もまるで区別できず、あらゆる両極性が存在していない。それは母親の世話と抱擁に委ねられ、葛藤を知らない世界で、「楽園」のイメージとして希求される (Jacoby, 1980)。そして人は、そこから引き離されてはじめて何かを希求することから、楽園のイメージの希求には、楽園を失っている、楽園から離別しているということが前提になっているのである。

本研究では臨床群に「一人の世界の親和性」がみられたが、これは楽園のイメージと考えることができるかもしれない。図版 12BG は自然の風景が描かれたものだが、臨床 26 の「暖かな陽射しや、緑、黄緑色の木や草、黄色の蝶、ピンクの花がたくさんあり」というのは楽園を描いたもののようにも思える。主人公が最後に亡くなっていることから、この世界が天上のものであると思われる。また統制群が「心地よい世界」を語っていたの

に対し、臨床群は「失われた心地よい世界」を語っていたという結果もみられ、臨床群には失われたとわかっているにもかかわらず一体的世界を求め続けるという近代的な主体が推測された。ここで重要なのは楽園を失うこと自体ではなく、楽園を希求し続けることなのであろう。なぜなら楽園は自我の発生によって失われる (Neumann, 1949) ため、楽園はそもそも失われるものだからである。Jacoby (1980) は楽園への憧れ、根源的体験への回帰は理性の偏った一面的なあり方から「自分の本性」へと帰ること、自分自身へ帰りたい、自己疎外から免れたいという憧憬に満ちた欲求であると述べている。その意味では、身体を自分から切り離して対象化し、理性でコントロールしようとする摂食障害の人が一体的世界を求めるということは、治療的な意味合いをもっていると考えられる。しかし自己疎外は近代的な在り方としては避けられぬものでもあり (梅村, 2008)、一体的世界はやはり幻想なのかもしれない。Jacoby も楽園でイメージされる世界とは違い、現実に生きなければならぬ世界は救済や調和や無葛藤状態を与えてくれることなどあり得ないため、「ノスタルジックな憧れがいつまでも具体的なものにとらわれていないことが決定的に重要」であると述べている。そこで一体的世界をどのようにあきらめていくかということも摂食障害の治療において1つの課題になると考えられるが、その難しさを示唆するのが臨床群の“深い結びつき”の語りであろう。

Jacoby は原関係というのは、母たる人物を、何の顧慮をも必要としないで自分の幸福の源泉として堂々と利用することが許される唯一楽園的な関係であると述べている。“深い結びつき”の語りは必ずしもこのような、自身の幸福のために相手を利用できるというものではなかったが、ぴったりと寄り添った幸せなカップルのイメージに、Jacoby の言う楽園的な関係をうかがうことはできよう。Jacoby は互いの期待と要求が完全にカバーしあうことなど決してありえず、なんらかの葛藤を引き起こすことは避けられないため、やはりこのような関係を他者に求めてもまず幻滅に終わるしかないというが、“深い結びつき”の語りからは、一体的世界の幸福なイメージのもつ強さがうかがわれ、楽園的な関係への志向性が感じられる。Jacoby は相手の心情を考えて、相手に対する期待や要求を柔軟にたえず代えていくことが成熟した大人同士の関係の根本であると述べていることから、成長することは一体的世界をあきらめていくことでもあると考えられる。また先に述べたように、自我の発生という人間の自然な成長が楽園の終わりを意味するということであるが、臨床群に成長のポジティブなイメージがみられなかったことから、摂食障害の人にとっては一体的世界があきらめ難いものであることを裏付けられると思われる。

ところで楽園が自我の発生によって終わるとするのは、聖書において人間が善悪の知恵を身につけた瞬間に楽園が失われたとされていることから、人間の意識が成り立つ基盤である対立物の識別能力のはじまりが楽園の終わりであると考えられることによる。このことは自他の違いを体験すること、つまり境界ができるということが一体的世界の終わりであると言い換えることができよう。一部ではあったが境界のつけがたさが臨床群にみられ、一体的世界の喪失を表す境界がつけ難いことが推測される。境界づけられていなければ一体的に近い世界が保たれていることになり、一体的世界に回帰したいという願いは一層強くなるのではないか。鈴木（1999）は“やせは現実世界からの逃避”と述べ、松木（2009）も摂食障害を“母親との幼児的密着の再現”と考えているように、一体的世界に回帰したいということには退行の意味もあるのだろうが、そもそも摂食障害の人は境界づけられていない在り方であるとも考えることもできるのではないか。一体的世界での落ち着きが臨床群にみられたのも、摂食障害の人にとっては分裂した近代的主体より、一体的な神話的主体の方がなじむ感じがあるのかもしれない。

ところで摂食障害の発症背景について、松木（2009）は価値観が多様化し、小学校時代のクラスみんなが平等で均一なあり方が崩れたときに、ひとつの価値観に密着させていた摂食障害の人たちが動揺してしまうということを述べている。これもひとつの価値観に密着するという一体的世界への親和性と、価値観の多様化という分裂した世界への移行が摂食障害の人にとって難しいということの意味していると考えられる。

周囲から支配されやすい主体が臨床群のみみられたという結果も、境界づけられていない摂食障害の人の在り方が反映されていると考えられる。自他の区別が適当についていれば他からくるものを否定することが可能である。逆に他を否定することで自他の区別がつくという言い方もできるだろう。下坂（1999）は摂食障害の人は他者に後ろ指を指されまいと No がいえないということを述べているが、他を否定し難い摂食障害の人の在り方が臨床像からもみられることがわかる。

以上、図版 12BG に語られたテーマの検討から、摂食障害の人は誕生以前の一体的世界への志向が強く、自他が分離していくことを意味する成長や境界づけが困難であることがわかった。そしてそこには人とのつながりを意味する基本的信頼感の希薄さ、あるいは基本的信頼感が成立していないことがあるのではないかと考えられた。自他の融合と分離、また基本的信頼感の成立というのは心理療法における根本的なテーマであるといえよう。実際の心理療法でこれらのことがどのように展開するのかについては、別稿にて論ずるこ

ととする。

【文献】

Erikson, E-H. (1963) *Childhood and Society*, 2nd ed. New York: W. W. Norton. 西平直・中島由恵（訳）（2011）アイデンティティとライフサイクル. 誠信書房.

藤本麻起子（2002）：摂食障害者の TAT 反応 図版 17GF にみられた「2つの世界の隔たり」箱庭療法学研究, **15**（2）, 59-66.

藤本麻起子（2005）：摂食障害の内的世界 - TAT 図版 19 における「守り」という観点から 京都大学大学院教育学研究科紀要, **51**, 181-192.

藤山正二郎（1999）：イニシエーションとしての思春期の病い 波平恵美子（編著） 病むことの文化 海鳴社 pp210-233.

原田眞理（1998）：ロールシャッハ・テストの特徴からみた摂食障害 ロールシャッハ研究, **1**, 18-28.

Jacoby M(1980) : *Sehnsucht nach dem Paradies – Tiefenpsychologische Umkreisung eines Urbilds*. Fellbach : Verlag Adolf Bonz GmbH. 松代洋一（訳）（1988）楽園願望. 紀伊國屋書店.

河合俊雄（2000）：心理臨床の理論 岩波書店.

川崎克哲（2005）：夢の分析—生成する〈私〉の根源. 講談社.

松木邦裕（2009）：摂食障害というところ 創られた悲劇／築かれた閉塞 新曜社.

Neumann, E(1949) : *Ursprungsgeschichte des Bewusstseins*, 林道義（訳）（2006）意識の起源史 紀伊國屋書店.

諏訪絵理子（2006）：摂食障害者のバウムテストについて（第1報）～空間利用に着目して～ 心身医学, **46**（3）, 248.

下坂幸三（1999）：拒食と過食の心理 岩波書店.

鈴木眞理（1999）：乙女心と拒食症 - やせは心の安全地帯 インターメディカル.

鈴木睦夫（1997）：TAT の世界 - 物語分析の実際 誠信書房.

坪内順子（1984）：TAT アナリシス 垣内出版

梅村高太郎（2008）：身体化の心理療法：心身症概念の批判的検討を通して 京都大学大学院教育学研究科紀要, **54**, 437-449.